

題目 「日本語の助動詞ハズダとその否定について」

専攻 言語学・応用言語学

入学年度 平成13年度

氏名 田中千恵

提出年月 平成17年1月提出

要旨

本論では、ハズダとその否定、特にハズハ(ガ)ナイについての考察を行う。ハズハ(ガ)ナイという表現は、従来の研究ではハズダの否定の一種である、という程度であまり詳しい説明はされていなかった。ここではハズハ(ガ)ナイはハズダの否定というよりは、むしろハズハ(ガ)ナイでひとかたまりの助動詞であると考えたい。

第一の理由に、ハズダの否定として考えられるもうひとつの表現ハズデハナイの存在がある。これはハズハ(ガ)ナイとは異なる意味を表わす。形式的にはハズデハナイをハズダの否定と考える方が妥当である。

第二に、「あまり」も「けっして」も否定と呼応する副詞であるのだが、ハズハ(ガ)ナイは「あまり」とは共起しにくく、「けっして」とは共起しやすいことがある。ハズハ(ガ)ナイは「そのようなことは有り得ない」というように、推測すること自体を否定する働きを持つと考えられる。

また、指示語やその他の語との共起のしかたや、他の助動詞の否定形とからめて、ハズハ(ガ)ナイについての考察を深めた。

目次

0. はじめに	1
1. ハズダ	1
1.1. ハズダの位置	1
1.2. ハズダの意味	3
1.2.1. 寺村(1984)	3
1.2.2. 益岡・田窪(1992)	3
1.2.3. 推測のハズダ・説明のハズダ	4
2. ハズダと否定	6
2.1. 内側の否定・外側の否定	6
2.2. ハズデハナイ	7
2.2.1. 先行研究 寺村(1984)	7
2.2.2. 寺村(1984)に基づくハズデハナイについての考察	8
2.2.3. 益岡・田窪(1992)におけるハズデハナイ	10
2.3. デハナイによるその他の助動詞の否定	11
3. ハズハ(ガ)ナイ	12
3.1. 否定と呼応する語とハズハ(ガ)ナイ	12
3.2. 指示語とハズハ(ガ)ナイ	15
4. その他の助動詞	17
4.1. ワケダ・ワケハ(ガ)ナイ	17
4.2. コトダ・コトハナイ	18
4.3. 否定と呼応する語との関係	19
5. まとめ	20
参考文献	21

0. はじめに

本論では、日本語の助動詞ハズダ、及びその否定形についての考察を述べる。ハズダについては寺村(1984)や益岡・田窪(1992)などをはじめ、先行研究で多く取り扱われているのだが、その否定に関しては少し触れる程度というものがほとんどである。

ハズダをハズ+ダと考えると、ハズダの否定はハズデハナイという形になると推測できる。しかし、ハズダと否定の組み合わせでよく使用されるのは、ハズデハナイよりむしろハズハ(ガ)ナイという表現ではないだろうか。ハズハ(ガ)ナイに比べると、ハズデハナイが使われる状況は意外に限られている。

そもそもハズダはいったいどのような働きをしているのか。ハズダの否定について考えるには、まずそこから始めなければならないだろう。1ではハズダについての基本的な事実を確認しておく。ハズダの内部に現れる要素、外部に現れる要素、またそれぞれがハズダの否定の形になった場合はどうなるのか、ということについて簡単に述べる。

次にハズダと否定についてである。否定がハズダの内にある場合と外にある場合、またハズダの否定にはハズデハナイ、ハズハ(ガ)ナイがあるため、それぞれについての考察をする。ハズデハナイは前述したとおり、ハズダの否定として使われていいはずなのだが、意外にも使用されない。先行研究寺村(1984)と益岡・田窪(1992)の差を比較しながら、ハズデハナイの使用にはどのような限定があるのかなどを詳しく見ていきたい。そして、ハズハ(ガ)ナイについてである。ハズハ(ガ)ナイについてはハズダの否定であると簡単に述べられていることが多いのだが、それだけでは説明がつかないような振る舞いがある。具体的には否定と呼応する語と共起した場合や、指示語と共起した場合である。これらとの関係を中心に、ハズハ(ガ)ナイを単にハズダの否定のひとつとしていいものかどうか考えたい。

さらに、ハズダ以外の助動詞の否定形についても観察を行う。-ダの否定として-ハ(ガ)ナイという形が現れる助動詞がハズダ以外にもある。これらについて考察することは、ハズダとハズハ(ガ)ナイについて考える上で助けとなるだろう。

1. ハズダ

1.1. ハズダの位置

ハズダについては名詞+ノ+ハズという形もあるが、ここでは否定との関係を特に見ていきたいため、節+ハズダの形について考える。

まず、節の内部について、

- (1) a. 雨が降るはずだ。
- b. 雨が降っているはずだ。
- c. 雨が降ったはずだ。
- d. 雨が降らないはずだ。
- e. *雨が降るだろうはずだ。
- f. *雨が降るかもしれないはずだ。
- g. *雨が降るらしいはずだ。
- h. *雨が振るそうなはずだ。

(1)で、ハズダに接続する節の内部にはテイル、タ、ナイなどが現れることができることがわかる。ダロウ、カモシレナイ、ラシイ、ソウダなどは内部に現れることはできない。そのなかで、ラシイやソウダはハズダの外部に現れることができる。

- (2) a. 雨が降るはずらしい。
- b. 雨が降るはずだそうだ。

先行研究（奥津（1974）pp.56-57、寺村（1984））によると、ラシイ、ソウダと同様、ダロウやカモシレナイといった概言のムードはハズダの後につく、とある。たしかにダロウやカモシレナイが内部に含まれるときよりは、外部にある場合のほうが違和感が薄れる。しかし(3)を見ると、どちらかといえば内部より外部の方がましという程度である。ハズダもダロウ・カモシレナイも推測の要素があるために、これらが共起すると、やや曖昧すぎる印象を受ける。特にカモシレナイは他の助動詞とハズダが共起した場合よりもだいぶ許容度が低いように感じられる。これは意味的な問題であろう。

- (3) a. ?雨が降るはずだろう。
- b. ??雨が降るはずかもしれない。

さて、ダロウハズダという語順は不自然であることは(1e)からもわかるのだが、実は(4)のようにハズダではなくハズハ（ガ）ナイにすると、ダロウとハズダがダロウ、ハズの順番で現れることができる。

- (4) a. *雨が降るだろうはずだ。
- b. 雨が降るだろうはずがない。

(4)のダロウが「明日は雨が降るだろう」といった文で使われる推量のダロウとは違った意味であるということも考えられるが、(4a)より(4b)のほうが、許容度が高いということに注目しておきたい。ハズダとハズハ（ガ）ナイが入れ替わることで許容度に差が出るというひとつの例である。

- (5) *雨が降るだろうはずではない。

また、ハズハ（ガ）ナイでは問題ないが、ハズデハナイではハズダと同様に、ダロウハズという語順は難しい。このような違いがどういった意味を持つのかはまた後に考えたい。

1.2. ハズダの意味

1.2.1. 寺村（1984）

寺村（1984）では、ハズダを説明のムードのひとつとして考えている。ムードの種類としては、説明のムードと概言のムードの二つが挙げられている。概言のムードにはダロウ、ヨウダ、ラシイ、ソウダ等が含まれており、これらは「ある事態の真偽について、それを自分が直接見たり、経験したりしたのではないから確言はできないが、自分の過去の経験、現在もっている知識、情報から、概ねこうであろうと述べる」（p.222）表現であるとしている。ハズダが含まれる説明のムードは、「現に事実としては聞き手が知っていることについて、その事態が生じた理由、原因とか、背景とか、あるいはある状況に照らしてみた場合の特別な意味、意義とかを、相手に説明しようとするもの」（p.222）だとしている。この説明のムードの仲間にはワケダ、トコロダ、コトダ（コトニナル、コトニスル、コトガアル、コトニナッテイル）、モノダ、ノダといったものが含まれている。

ハズダは概言のムードに近いようにも思えるが、ハズダを使う場合には、話し手は何らかの根拠を（それは話し手の思い込みかもしれないが）もっている。そして、ハズダを使うことで、話し手は「その根拠から推測すれば当然このようになるのだ」ということを説明しているというのである。

1.2.2. 益岡・田窪（1992）

益岡・田窪（1992）ではハズダは概言のムードの一つとして数えられている。寺村は別のものとして扱っていたダロウなどの仲間である。ハズダについてはラシイ、ヨウダ、ミタイダと並べて「証拠のある推定」を表すとしている。ちなみに他の概言のムードには断定保留のダロウ・マイ、可能性のカモシレナイ、直感的確信のニチガイナイ、様態のソウ

ダ、伝聞のソウダ、トイウ、トノコトダなどに分かれるとしている。

「証拠のある推定」を表す助動詞の中で、ハズダは、「一般的な知識や記憶から推論、計算等の論理的操作によって得られる帰結を述べるときに用いられる」(pp.128-129)ものであると定義づけられている。

1.2.3. 推測のハズダ・説明のハズダ

以上の先行研究を踏まえながら、ハズダの意味について、否定形と話を絡めながら考えていきたい。寺村と益岡・田窪のハズダの扱いは多少異なっているが、「ハズダは話し手が何らかの根拠から推測を立て、その結論を語る際に用いられる」ということは共通している。ここから、話し手がハズダを使って何かを語る場合、話し手のその推測についての確信度はダロウやカモシレナイに比べるとかなり高いことが表される。

- (6) a. 雨が降るはずだ。
- b. 雨が降るだろう。
- c. 雨が降るかもしれない。

(6)を見ると、やはり(6a)が一番「雨が降る」確率が高いと感ぜられる。(6a)のような発言をした場合、話し手はよほど思い込みの激しい人物でない限り、事前にぶ厚い雲を見ているだとか、台風が来ているなどの「雨が降る」という推測を立てるにふさわしい根拠をもっているはずである。

このようにある根拠から推測をし、その結果を述べる際に使われるハズダがあるのだが、ハズダにはもうひとつ別の使用方法があると思われる。益岡・田窪(1992)では注釈に、ハズダは「既に観察されている帰結を因果的に説明する事実を新たに発見したことを表す場合がある。つまり、不審であったことが、新たに発見した事実により納得できたことを表す用法で、この用法は、「説明」のモードに近い」(p.129)とある。

- (7) a. 冷えるはずだ。見る、雪が降ってきた。
- b. こんなに給料が低いのでは、みなやめたがるはずだ。
- c. まだ未成年だなんて、親が心配するはずだ。

(7)がそのようなハズダの使用例である。これらのような使い方のハズダは、ハズダを説明のモードとして取り扱っていた寺村(1984)では、単に「特殊な使い方」としか触れられていなかったものである。

では、(7)で使用されているハズダと、先に挙げた推測を述べる際のハズダとの違いは、

具体的にはどのようなものなのだろうか。

- (8) a. 花子が来ている。おそらく、太郎も来るはずだ。
- b. 花子が来ている。道理で、太郎も来るはずだ。

(8a)が推測を述べているハズダ、(8b)が「説明のモードに近い」とされているハズダである。(8)の二つの文における最も大きな違いは、実際に太郎が来るかどうかである。(8a)では太郎が来るだろうと発話者が推測している。ダロウやカモシレナイよりは確率が高いとはいえ、これはあくまでも推測であるため、本当に太郎が来るかどうかはわからない(益岡・田窪(1992)における概言のモード)。それに対して、(8b)はすでに太郎が来ることは確定している。話し手は、ハズダという表現によって、花子が来るという事実が太郎も来るという結果を引き起こしたのだ、という説明をしているのだ(益岡・田窪(1992)における説明のモード)。

また(8a)と(8b)ではアクセントの位置も異なり、(8a)では「来るはずだ」のクの部分だけにアクセントが置かれるが、(8b)のような形でハズダが使われる場合は、「来るはずだ」のハの部分にもアクセントを置いて発音される。

このような形のハズダと、否定形との関係はどのようなものだろうか。まず、節の内部だが、前の節が否定の要素をもっている、(8a)と(8b)のような二つの用法はどちらも可能である。

- (9) a. 雨が降っている。おそらく、太郎は来ないはずだ。
- b. 雨が降っている。道理で、太郎は来ないはずだ。

(8a)と(8b)の違いと同様に、(9a)では太郎が来るという可能性もまだ残っているが、対して(9b)では太郎が来ていないという事実はすでに確定されていて、太郎が来るという可能性は残っていない。

さらに、(8b)や(9b)のハズダは助動詞ワケダに言い換えることができるが、(8a)、(9a)はワケダへの言い換えができない。

- (10) a. *花子が来ている。おそらく、太郎も来るわけだ。
- b. 花子が来ている。道理で、太郎も来るわけだ。
- (11) a. *雨が降っている。おそらく、太郎は来ないわけだ。
- b. 雨が降っている。道理で、太郎は来ないわけだ。

(10b)と(11b)の意味は(8b)(9b)とほぼ同じである。前半部分が後半部分の理由となっている

ことがワケダによって説明されている。ワケダには推測を表す意味はないので、(10a)(11a)のように「おそらく」とは共起できない。

以降、推測に使う際の前者のハズダを「推測のハズダ」、ワケダと言い換えができる後者を「説明のハズダ」と呼ぶことにする。

さて、ハズハ(ガ)ナイという表現はどちらのハズダに関わりが深いのだろうか。

(12) 太郎が来るはずがない。

(12)のような文は、「太郎が来る」という推測をすること自体ありえないことだ、と解釈できる。つまり、どちらのハズダかと言えば、推測のハズダの否定だと考えられる。(12)を説明のハズダの否定として解釈することは可能だろうか。

(13) *雨が降っている。道理で、太郎が来るはずがない。

説明のハズダでは、「太郎が来るはずだ」といった場合、「太郎が来る」の部分は真、実際に起きた事実である。しかし、ハズハ(ガ)ナイという形になるとハズの内部ごと否定されてしまう。「道理で」という説明のハズダを導きやすい副詞を加えても、(13)で「太郎は来る」という部分を事実として解釈するのは不可能である。したがって、ハズハ(ガ)ナイは説明のハズダの否定として使われることはないといえる。

同じく、ハズデハナイも説明のハズダの否定としては使われることはない。説明のハズダで重要となるのは、ハズダで説明される部分が真でなければならない、ということだ。真でなければならない内容を、外側から否定してしまっはやはりまずい。そもそも、否定してしまっは説明のハズダにならないと言ったほうがいいだろうか。つまり、ハズハ(ガ)ナイ、ハズデハナイ、どちらも説明のハズダの否定ではありえないのである。

2. ハズダと否定

2.1. 内側の否定・外側の否定

ハズダの内部に否定が現れることは可能なのは前述の通りである。ここでは、否定が内部にある形ナイハズダと外部にある形ハズデハナイ、ハズハ(ガ)ナイを比較していく。まずナイハズダとハズデハナイである。

(14) a. 太郎は来ないはずだ。

b. ?太郎は来るはずではない。

(14b)は、後のハズデハナイについての考察で述べるが、何も前提のないまっさらな状態では発言しにくい。(14a)との最大の違いはそこといってもいいだろう。

より詳しく見ていくと、話し手は(14a)ではまず何らかの根拠があり、そこから推測した結果、「太郎は来ない」という結論をだした、という順序で「太郎は来ないはずだ」と発言していると考えられる。(14b)では、否定の推測と言うよりは、「太郎は来るという予定があるかどうかと言うと、それはない」というように、むしろ予定の否定をしているように取れる。

次に、ナイハズダとハズハ(ガ)ナイを比較してみよう。

(15) a. 太郎は来ないはずだ。
b. 太郎は来るはずがない。

(15a)の場合では太郎が来ないという推測がなされているのに対し、(15b)の場合では、太郎が来る、という推測を行うこと自体を否定している。

(16) a. 宝くじは当たらないはずだ。
b. 宝くじは当たるはずがない。

より一般的な話題である(16)を見ると、ナイハズダは発話者の推測だということが現れているが、ハズハ(ガ)ナイではやはり推測すること自体を否定している。話が一般的になったこちらの例では、もはや個人的な推測というよりは、一般的にありえない、不可能だということが示されていると考えられる。

2.2. ハズデハナイ

2.2.1. 先行研究 寺村(1984)

寺村はハズダについて、意味だけではなくその構造もまた重要視している。ハズダの意味についての考察で例に挙げた日本語の助動詞がある(ワケダ、トコロダ、コトダ...など)。これら助動詞を、従来のように「形式名詞+ダ」ではなく、助動詞という一つのまとまった形で扱う構造的な理由には、

(17) a. ダ デハナイに、簡単に否定に置き換えることができない

b. ダを格助詞に置き換えにくい

などが挙げられている。いずれも名詞+ダでは容易にできるものである。

名詞+ダとして使われているのか、あるいは助動詞として使われているのかの見分け方についても考察されている。ただ、ハズダについてはハズが実質的な名詞として使われることが少ないからだろうか、名詞+ダなのか助動詞なのかは問題にされていない。

寺村が取り上げているのはトコロダについてである。名詞のトコロ+ダと助動詞トコロダの区別については以下のようなものだ(以降、カタカナの例文は寺村の例(pp.262-263))。

- (18) ココ八森鷗外ガ住ンデイタトコロデス
(19) a. イマチョウド森先生ガオ帰リニナツタトコロデス
b. 一週間グライ温泉ニデモ行キタイトコロダ

(18)は助動詞で、(18)が形式名詞+ダの形である。助動詞のトコロダの特徴である、「ダデハナイに、簡単に否定に置き換えることができない」や「ダを格助詞に置き換えにくい」という点について考えてみる。

- (18)' ココ八森鷗外ガ住ンデイタトコロデハナイ

例えば(18)について、上のようには簡単にいうことができる。しかし、

- (19)' a. *イマチョウド森先生ガオ帰リニナツタトコロデハアリマセン
b. *一週間グライ温泉ニデモ行キタイトコロデハナイ

(19)のようなトコロダになると否定にできなくなる。また、(20)のように、(18)のトコロ以降に格助詞をつけて動詞につなぐことはできるが、(19)ではそうはいかない。

- (20) 森鷗外ガ住ンデイタトコロガ観光コースニハイッテイル

このような差から、寺村はトコロダをはじめ、ハズダ、ワケダ、トコロダ、コトダ、モノダ、ノダなどは形式名詞+ダの用法としてではない、助動詞としての用法もあるのだと寺村は結論づけている。

2.2.2. 寺村(1984)に基づくハズデハナイについての考察

さて、寺村の(17)によると、日本語の助動詞とされているものは、ダデハナイに簡単に置き換えることができないとされている。ちょうど例に出されたトコロダは、たしかにトコロデハナイとすると不自然になる。では他の助動詞ではどうだろうか。本論で取り扱うハズダには、ハズデハナイという形も不可能ではない。寺村はハズデハナイという形についてはハズハ(ガ)ナイと比較して考察している。

- (21) コンナハズデハナカッタ、失敗シタ

ハズダの否定は、(21)のようなときにハズデハナカッタとなる以外、全てハズガ(ハ)ナイとなるというのである。ハズデハナイとハズハ(ガ)ナイの違いについては特に触れてはいない。

寺村が述べている上のような例以外でハズデハナイが使われることはないのだろうか。確かにハズデハナイは、ハズハ(ガ)ナイよりも使用にあたっての制限が厳しいようではあるが、ハズハ(ガ)ナイと比較しながらハズデハナイを使うことが可能な状況を考えてみたい。まず(22)の二つの文を見てみよう。

- (22) a. 犬が木に登るはずはない。
b. ?犬が木に登るはずではない。

この二つの文だけを見比べてみると、確かにハズデハナイはハズハ(ガ)ナイより不自然である。しかし、次の例のように文脈を与えるとどうだろうか。

- (23) 芝居の練習中、台本には猿が木に登るとあるのに、何を思ったか犬役の方が木に登り始めた。舞台の監督が嘆くように言う。「犬が木に登るはずではない」

少なくとも、何も文脈のない(22b)よりは不自然さがへったように思える。もうひとつ同様の例を見てみよう。

- (24) a. 花子は負けるはずはない。
b. ?花子は負けるはずではない。

(24b)についても(22b)と同様に文脈を与えると許容度が高まる。例えば、花子の参加するであろう試合が八百長であったとしよう。そしてその八百長では、花子は勝つことになっていた。八百長の事情を知っているものなら、花子について「花子は負けるはずではない」という発言も可能である。

(25) (花子が勝つという予定があった状況で)

花子は負けるはずではない。

(22b)、(24b)の許容度が上がるのは、文脈によって、ハズデハナイと話し手が発言するだけの具体的な証拠を持っていることが示唆されるからだと思われる。もちろん、ワケハ(ガ)ナイと発言する場合もそう言うだけの何らかの理由がある。しかし、(22b)、(24b)のようにハズデハナイと言う場合は、もっと確かな予定や計画、手筈というものが存在しており、語り手がそれを知ってなければならないように思える。

(17)の考え方から行くと、ハズデハナイは、むしろ名詞のハズ+デハナイという形なのかもしれない。ダ デハナイに言い換えられたということと、ハズハ(ガ)ナイというときよりもハズの内容の具体性が高いように感じられるからである。しかし、これについては確定することは出来ない。

- (26) a. 花子が負ける予定をぶち壊しにした。
b. *花子が負けるはずをぶち壊しにした。

(26)のように格助詞ヲにつなげることは不可能だからである。そもそも、ハズダなどの表現を助動詞ととるか、名詞+ダととるかは難しいところがある。ここで言えるのは、ハズデハナイという形になると、ハズダよりも具体的な根拠が必要となるということである。

2.2.3. 益岡・田窪(1992)におけるハズデハナイ

次に、益岡・田窪(1992)でのハズデハナイの位置付けを見ておこう。益岡・田窪はハズデハナイをハズダの否定としている。これは寺村の、ハズハ(ガ)ナイをハズダの否定として、ハズデハナイを特別な形とした説とは対照的である。このような差が出たのは、益岡・田窪はハズダを概念のムードとして扱い、寺村はハズダを説明のムードとして扱っているという違いからであろう。ただ、そもそもハズダの否定について、益岡・田窪では軽く注釈で触れられているのみである。そこではハズデハナイは、「「はずだ」の否定形「はずではない」は、現在自分が直面している事態が、既成の知識から予測された帰結でないということを表す」(p.129)とされている。

この定義と、寺村の主張を踏まえた上での考察を比較してみよう。

- (23) 芝居の練習中、台本には猿が木に登るとあるのに、何を思ったか犬役の者が木に登り始めた。舞台の監督が嘆くように言う。「犬が木に登るはずではない」

(23)の例を考えると、確かに上記の益岡・田窪のハズデハナイの定義に沿っている。現在の「犬が木に登っている」という事態は、台本と言う既成の知識からは予測できないことだ、と話し手である舞台監督は言っているのである。ではもうひとつの例を見てみよう。

(25) (花子が勝つという予定があった状況で)

花子は負けるはずではない。

(25)では、八百長が行われるという既成の知識から、「花子が負ける」という事態は予測できない、ということが示されている。ただしこの例では、現実に話し手が「花子が負ける」という事実直面している必要はない。たとえ花子の参加する試合が始まる前であっても、「花子は負けるはずではない」と発言することは可能である。これを見るとハズデハナイの用法について、特に「現在自分が直面している事態」と限定する必要はないようにも思える。どちらにせよ、確かな証拠(益岡・田窪の「既成の知識」)がなければハズデハナイと発言するのは不自然である。

(27) ?今日は、雨が降るはずではない。

(27)の例のように、確かな証拠を得にくい天気の話などでは、ハズデハナイを使うと違和感が生じる。(27)を自信たっぷりに言うことができるとしたら、それは未来から来た人間か神様くらいのものであろう。やはりこちらの主張を考えてみても、ハズデハナイはハズダより確かな根拠が必要だと思われる。

2.3. デハナイによるその他の助動詞の否定

寺村が例に挙げたトコロダに関して言えば、確かにトコロデハナイという表現で、助動詞のトコロダの否定を表すことはできない。その他の助動詞はどうだろうか。ダロウ、ソウダ、ラシイなどの寺村の言う概言のムードは、そもそも否定をあとにつけることすら難しい。

- (28) a. *雨が降るだろうない。
b. *雨が振るそうではない。
c. *雨が降るらしくない。
d. *雨が降るみたいではない。
e. ??雨が降るようではない。

では、説明のムードと呼ばれるハズダ、ワケダ、トコロダ、コトダについてはどうだろうか。

- (29) a. ?雨が降るはずではない。
b. 雨が振るわけではない。
c. 雨が降るところではない。
d. 雨が降ることではない。
e. ??雨が降るものではない。
f. 雨が降るのではない。

(29)を見たところ、それほど違和感があるものはない。しかし、実際はデハナイをつけないものと比較すると、意味がずれてしまっているものが多い。寺村が例に挙げたのはトコロダで、それについてはすでに述べたとおりである。さらに、ワケダ、コトダでも意味の変化が見られる。ワケダとコトダについては否定形としてワケハ(ガ)ナイ、コトハナイがあり、ハズハ(ガ)ナイと形も似ているため、あとにまとめて考察したい。これを見た限りでは、デハナイという形で問題なく否定にできるのはノダくらいのものである。それ以外は元の助動詞的な意味からは変化してしまう、もしくは否定にすらできない、というものだ。これを考えると、そもそも助動詞の否定とは可能なのかということが疑問になってくる。ここではひとまず、その他の例のように、ハズデハナイも元の助動詞ハズダの否定とは言い切れないということだけを述べておく。

3. ハズハ(ガ)ナイ

3.1. 否定と呼応する語とハズハ(ガ)ナイ

ハズハ(ガ)ナイは寺村(1984)においてはハズダの否定、益岡・田窪(1992)においては「可能性の否定」として扱われていた。ハズハ(ガ)ナイについて、もう少し詳しく考えていこう。ここでは否定表現と関係が深い、「しか」「あまり」「けっして」などの語とハズハ(ガ)ナイの関係を調べる。まず、「しか」についてである。

- (30) a. *太郎はリンゴしか食べる。
b. 太郎はリンゴしか食べない。
c. 太郎はリンゴしか食べるまい。

このように、「しか」は否定的な語と共に使用される。

- (31) a. 太郎はりんごしか食べないはずだ。
b. ??太郎はりんごしか食べるはずがない。

(31a,b)はどちらも否定の要素がでていると考えられるのだが、ハズハ(ガ)ナイという形になってしまうと、「しか」とのつながりがうまくいかない。全く意味がとれないというほどでもないが、(31a)とくらべると(31b)は許容度が下がる。

- (32) 太郎はリンゴ以外食べるはずがない。

「しか」を「以外」という言葉に置き換えるとまったく問題はなくなる。「以外」は否定後の有無によって文法的か否かが変わることはないため、やはり「しか」とハズハ(ガ)ナイの相性が問題だと言える。

- (33) a. りんごは太郎しか食べないはずだ。
b. ??りんごは太郎しか食べるはずがない。
(34) a. りんごは食事のあとにしか食べないはずだ。
b. ??りんごは食事のあとにしか食べるはずがない。

(33)、(34)は「しか」の位置を変えてみた例ではあるが、(31)と同様に、各例のaとbでは許容度の差が出てくる。

「しか」との相性が悪いのはハズハ(ガ)ナイだけではない。ハズハ(ガ)ナイとほぼ同じように使われ、また構造的にも似ているワケハ(ガ)ナイも、「しか」と共に使うのは違和感がある。(35)はその例である。

- (35) ??太郎はリンゴしか食べるわけがない。

ハズハ(ガ)ナイ、ワケハ(ガ)ナイ以外の助動詞的な否定表現と「しか」との関係は、というと、それほど悪くはない。

- (36) a. リンゴしか食べることがない。
b. リンゴしか食べることができない。
c. リンゴしか食べようとしなない。

(36)を見る限り、なぜ(31)-(34)のような結果がでるのか、疑問である。これを見る限りでは、ハズハ(ガ)ナイ、ワケハ(ガ)ナイという表現だけが、どうも「しか」との呼応がうまくいかないようである。

では次に、「あまり」という副詞とハズハ(ガ)ナイの関係について考えてみる。この副詞は、「しか」と同様、否定語を必要とする。

- (37) a. *太郎はあまりリンゴを食べる。
b. 太郎はあまりリンゴを食べない。

ここから、(31)のようにナイハズダとハズハ(ガ)ナイで比較してみる。

- (38) a. 太郎はあまりりんごを食べないはずだ。
b. ??太郎はあまりりんごを食べるはずがない。

「しか」の場合と同じように、やはり(38b)には多少違和感がある。他の否定表現と「あまり」の相性は、やはり「しか」と同様、特に悪くはない。

- (39) a. 太郎はあまりリンゴを食べることがない。
b. 太郎はあまりリンゴを食べようとしない。
c. 太郎はあまりリンゴを食べることができない。

では、ハズハ(ガ)ナイという形になると「しか」、「あまり」などといった否定表現を必要とする語とのつながりがうまく持てないのだろうか。次の例を見ると、そうとも言い切れないことがわかる。

- (40) a. *太郎はけっしてリンゴを食べる。
b. 太郎はけっしてリンゴを食べない。

「けっして」も「あまり」などと同じように後ろに否定語を伴う。しかし、次の(41b)は(31b)や(38b)のほどは違和感がない。

- (41) a. 太郎はけっしてリンゴを食べないはずだ。
b. 太郎はけっしてリンゴを食べるはずがない。

「しか」と「あまり」はハズハ(ガ)ナイと共起しにくい、「けっして」はハズハ(ガ)ナイと共起することができる。これはなぜだろうか。まずは同じ副詞である「あまり」と「けっして」の差について考えてみよう。

- (42) a. ??あまりリンゴを食べるはずがない。
b. けっしてリンゴを食べるはずがない。
(43) a. あまりリンゴを食べることがない。
b. けっしてリンゴを食べることがない。

「あまり」と「けっして」はどちらも程度を表す副詞である。二つの違いはそれぞれが表す程度である。(43)はきちんと解釈ができるということは、ハズハ(ガ)ナイが単に「あまり」という副詞との相性が悪いということになる。ハズハ(ガ)ナイは可能性の否定であるため、「あまり」という言わば中途半端な程度を表す副詞とは共起しにくいことだろう。

では「しか」の場合はなぜハズハ(ガ)ナイと共起できないのだろうか。ひとつの考え方として、ハズハ(ガ)ナイはハズハ(ガ)ナイというひとまとまりで固まってしまっているため、「しか」とハズハ(ガ)ナイのナイの部分が結びつきにくいのではないかと、ということが考えられる。「けっして」との共起が可能となるのは「けっして」はハズハ(ガ)ナイ全体と呼応することができるからであり、「あまり」や「しか」は可能性の否定をあらわすハズハ(ガ)ナイそのものとは呼応できない、という考えである。

3.2. 指示語とハズハ(ガ)ナイ

さて、ハズダとハズハ(ガ)ナイについて、一方が使えるがもう一方が使えないという場合がある。(44)、(45)に挙げているのは指示語、いわゆるコソアと共起する場合である。

- (44) (「太郎は行ったのか?」という問いに対して)
a. 行ったはずだ。
b. 行ったはずが(は)ない。
c. そのはずだ。
d. そのはずが(は)ない。
e. *そんなはずだ。
f. そんなはずが(は)ない。

(44a,b)は当然問題なく言うことができるが、問題はそれ以降である。「太郎が行った」と

いう事実をソノ、あるいはソннаで指すと、後ろにハズダが来るのか、ハズハ(ガ)ナイが来るのかで文の成立・不成立が変わってくるのである。ソノは(44b,c)で現れている例であるが、後がハズダのように肯定の形であっても、ハズハ(ガ)ナイというように否定の形であっても、使うことができる。しかし(44e,f)を見ればわかるが、ソннаを使用した場合は、「そんなはずだ」と肯定の形であるハズダを続けることができない。ハズハ(ガ)ナイであればソннаのあとにも続けられる。

ではコ系、ア系の指示語とハズダの関わりはどのようになっているだろうか。

- (45) a. *こんなはずだ。
b. こんなはずが(は)ない。
c. *あんなはずだった。
d. あんなはずが(は)なかった。

ソннаと同様に、ハズハ(ガ)ナイであればコンナ・アンナの後に続けるのだが、ハズダはそれが不可能である。

- (46) a. こうなるはずだ。
b. ああなるはずだ。
c. そうなるはずだ。

ハズダが指示語と全く共起出来ないという訳ではない。(46)を見ればわかるとおり、ソнна・コンナ・アンナという形でなければ、ハズハ(ガ)ナイという形でなくとも指示語と共起できる。

ハズダが不可でハズハ(ガ)ナイは可となる例には、前に出た(4)などもある。

- (4) a. *雨が降るだろうはずだ。
b. 雨が降るだろうはずがない。

これらの違いについてはいまだにうまく説明ができていない。が、ハズハ(ガ)ナイが単にハズダの否定のひとつであると考えより、むしろハズハ(ガ)ナイで一つのまとまりを持っていると考え、ハズダでは言えないことがハズハ(ガ)ナイでは簡単に言えるということへの、ひとつの答えになるように思う。

4. その他の助動詞

ハズダとハズハ(ガ)ナイのように、-ダとなっている助動詞で、否定に-ハ(ガ)ナイという形があるものを探してみた。ワケダ・ワケハ(ガ)ナイとコトダ・コトハナイのふたつのペアがそれである。以下はこれらについて考察する。

4.1. ワケダ・ワケハ(ガ)ナイ

ワケダは前述したとおり、説明のハズダと同様の使い方をすることがある。

- (47) a. 花子が来ている。おそらく、太郎も来るはずだ。
b. 花子が来ている。道理で、太郎も来るはずだ。
(48) a. *花子が来ている。おそらく、太郎も来るわけだ。
b. 花子が来ている。道理で、太郎も来るわけだ。

(47b)と(48b)はほぼ同じことを言っているといっていいただろう。話し手はワケダを使うことで、「太郎が来る」という事実が、「花子が来ている」という前提から、当然導き出される結果であるということの説明しようとしているのである。ワケダの基本的な使い方はこのようなものだ。

では、ワケダとワケハ(ガ)ナイについて、まずナイハズダとハズハ(ガ)ナイのように、ナイワケダとワケハ(ガ)ナイにも差があるかを見る。

- (49) a. 太郎は来ないわけだ。
b. 太郎は来るわけがない。

(15)でのナイハズダとワケハ(ガ)ナイ同様に、ナイワケダとワケハ(ガ)ナイも意味が異なってくる。(49a)のナイワケダはナイ+ワケダ、つまり単にワケダによって説明される中身が「太郎が来ない」という否定の文であるだけである。一方、ワケハ(ガ)ナイが使われる(49b)では、「太郎が来る」という可能性がまるごと否定されている。

ワケダには、ワケハ(ガ)ナイという否定の形の他に、ワケデハナイというものもある。

- (50) 花子が来るからといって、太郎が来るわけではない。

ワケデハナイという形になると、また少し話が複雑になる。(50)では、「本来なら「花子が来る」という事実から「太郎が来る」という推論が成り立ちそうだが、実際はそうで

もないのだ」と話し手は言いたいのである。

ここで重要なのは、ハズデハナイとワケハ(ガ)ナイでは意味の違いがあるのと同様に、ワケデハナイとワケハ(ガ)ナイの間にも意味的な差があるということである。

4.2. コトダ・コトハナイ

コトダについては名詞のコト+ダの形も多くある。名詞のコト+ダか、助動詞のコトダなのか、というのは区別しにくいところではあるが、(51)と(52)を比較して区別したい。

- (51) a. 背を伸ばすために重要なのは、たくさん食べることだ。
b. 花子が好きなのは、本を読むことだ。

(51)のような例を名詞のコト+ダという形と考える。ここで取り扱う助動詞としてのコトダは、以下の(52)のように使用されるものである。

- (52) a. 背を伸ばしたいなら、たくさん食べることだ。
b. 夜道には気をつけることだ。

コトダによって、-するのが重要だ、必要だ、という意味を表している。これらのコトダの否定は、コトハナイという形になる。

- (53) a. 無理をしてたくさん食べることはない。
b. あなたが気に病むことはない。

コトハナイは、-する必要はない、という意味になる。ここでひとつ注意したいのが、ワケハ(ガ)ナイ、ワケハ(ガ)ナイはハズガナイ、ワケガナイというようにハとガ、どちらでも言い換えができるのだが、コトハナイはコトガナイに言い換えると意味が異なってくるということである。

- (53)' a. 無理をしてたくさん食べることがない。
b. ??あなたが気に病むことがない。

(53)'の文章は、(53)とのように-する必要はないという助動詞的な意味ではなく、名詞のコト+ダでしか解釈できない。

また、コトハナイをコトデハナイに書き換えることもできない。この書き換えが不可能なのはワケハ(ガ)ナイとハズデハナイ、ワケハ(ガ)ナイとワケデハナイの関係と同じである。

- (53)" a. 無理をしてたくさん食べることではない。
b. あなたが気に病むことではない。

(53)"は(53)と同じ意味には解釈できず、(53)'と同じように名詞のコト+ダの解釈しかできない。

4.3. 否定と呼応する語との関係

ハズハ(ガ)ナイは「しか」と共起することが難しかった。似たような形である、ワケハ(ガ)ナイやコトハナイと「しか」との関係はどのようなものになるかを調べる。

- (35) ??太郎はリンゴしか食べるわけがない

ハズハ(ガ)ナイと「しか」との関係を検討した際に、ワケハ(ガ)ナイにも一度触れたが、ハズハ(ガ)ナイ同様に、「しか」とは共起し難いという結果であった。ワケデハナイやコトハナイなどはどうなるだろうか。

- (54) a. 太郎はリンゴしか食べないわけだ。
b. *太郎はリンゴしか食べるわけではない。
c. ??太郎はリンゴしか食べるわけがない。

まず、ワケデハナイについてであるが、(54)を見る限り、ワケデハナイもワケハ(ガ)ナイもハズデハナイやハズハ(ガ)ナイと同様に「しか」とは共起しにくい。

- (55) a. ダイエットのためにも、リンゴしか食べないことだ。
b. ダイエットのためにも、リンゴしか食べることはない。

次に、コトハナイについてである。(55b)は解釈可能であるが、ここでの「ことはない」は「-する必要はない」という意味ではない。助動詞のコトダの否定にはなっていないということだ。

以上を見る限り、ワケハ(ガ)ナイやコトハナイという表現も、ハズハ(ガ)ナイと同

様に「しか」とは共起しにくいと考えられる。ハズハ(ガ)ナイについてその理由として上で提案したのが、ハズハ(ガ)ナイは助動詞ハズダ+否定というような組み合わせではなく、むしろハズハ(ガ)ナイそのままひとまとまりの助動詞として扱ったほうがいいのでは、という考えである。これはそのままワケハ(ガ)ナイやコトハナイにも当てはめられるのではないだろうか。

5. まとめ

以上、ハズダとその否定形について考察してきた。まず、ハズダ内部に否定が現れる場合があったが、これは-ナイという否定の内容の推測をしているに過ぎない。やはり話が複雑になるのはナイがハズダのあとに現れる、ハズデハナイとハズガナイの解釈だ。

ハズデハナイは、形としてはハズガナイよりもハズダの否定だと考えやすい。当然のことながら、-ダの否定は普通-デハナイになり、-ハナイ、-ガナイという形にはならない。さて、ハズデハナイはハズダを使用する際よりも、具体的な根拠が必要だと考えられる。ハズダとは言えるような状況でも、ハズデハナイと言うのは困難という例がいくつかあった。本論で取り上げた天候の話などは、ハズデハナイによって語るのは難しいものの代表である。ハズデハナイとしたときは、ハズダの元の形である名詞のハズ+ダという構造が強調され、ハズが「手筈」などの具体的な名詞により近く感じられる、というのが本論での説である。ハズデハナイのハズが本当に名詞であるかということは扱いにくい問題だが、少なくともハズダとして使われる場合よりも、ハズデハナイのほうがハズの内容は具体的であるように思える。

また、ハズハ(ガ)ナイについては、意味としては益岡・田窪(1992)で述べられていた「可能性の否定」を表すものである。「しか」や「あまり」とは共起しにくい、「けっして」とは共起できるという性質から、ハズダ+否定の組み合わせとして考えるのではなく、ハズハ(ガ)ナイひとかたまりで「可能性の否定」を表す助動詞であると扱いたい、ということこそここで提案した。ワケハ(ガ)ナイやコトハナイも否定の意味を含むひとつの助動詞であると考えてもよいように思われる。先にも述べたが、-ハナイ、-ガナイという形が-ダの否定とされるのも不思議な話である。ハズハアルという言い方は、普通はされない(ハズハナイに対して、皮肉のように使うこともあるかもしれない)。

ハズダとハズデハナイ・ハズガナイについては以上のようなものである。助動詞の否定では、本論でも少しだけ取り上げたワケダとワケデハナイ・ワケガナイ、コトダとコトハナイの関係も興味をひかれる。これまでの考察がその他の助動詞の否定の分析にも役立つことを期待する。

参考文献

1. 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版
2. 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法』くろしお出版
3. 奥津敬一郎(1974)『生成日本文法論』大修館書店
4. 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版